

児童健全育成賞・奨励賞

小さな事柄からの褒め育て

—誰もが集え、育ちあっていく児童センターとなり得ていくために—

岡山県岡山市

岡山市旭東児童センター 児童厚生員 渡 邊 紋左子

1. はじめに

この文章を書くにあたって3年という月日を重ねている。過去に中学校での約10年間の講師経験や他の職業経験を踏まえながら、現在勤務している児童センターで子どもたちとの関わりをもつ中で「誰もが集い、育ちあっていく場所」の大切さを伝えたいと思い、書き始めた。

これを記している最中には新型コロナウイルス感染症の影響があったり、一緒に苦楽を共にした職員のほとんどが退職や人事異動で転勤してしまったりと環境がガラリと変わってしまう事象があった。それでも新たに旭東児童センターへ来られた先生方や地域子育て支援課のアドバイザーをはじめ職員の方々、どんな時もずっと下支えしてくださっている地域の方々の理解や協力のもと、今日も児童センターの運営ができ、たくさん子どもたちやその保護者に関わっていることに感謝している。

岡山市には現在、岡山市直営の児童館・児童センターが9館と社会福祉協議会が運営している児童館が9館、ふれあい公社が運営している児童館が5館の計23館がある。私は岡山市直営の児童館・児童センターで勤務した（児童館2館・児童センター1館）計8年間の経験のなかで、そして未曾有の経験であった新型コロナウイルスにより、様々な問題に直面した。日々悩み、コロナ禍前まで普通に取り組んでいたことができない状況に悪戦苦闘しながらも、アフターコロナに向けて「今まで上手くできていないことを変えられるチャンス！」と

捉えて、コロナ禍明けに向けての課題をひとつずつクリアしてきた児童センターでの「子どもから親、そして地域の人々」が集える地域協働活動の状況を伝えたい。

現在勤務している岡山市旭東児童センターは、岡山市の中心部、旭川の東側に位置し、児童センターより近隣500m半径に公立の幼・小・中学校、国立大学附属の幼・小・中学校、私立の中・高等学校、公立の高等学校と公立の保育園、社会福祉法人の保育園など学校園が多く存在する。また企業の家族寮や社宅マンションが複数あり、子育て世代が多い地域である。近隣に国公立、私立の学校園が多いことに加え、昨今の庭環境の多様化により保護者の共働きが多いことなどから、幼少期より保育園や3歳児保育のある幼稚園に入園する子どもたちも多く、地域の公立幼稚園への入園が少ないという側面をもっている。その延長線上で、地域子どもたちの数に比べ地域の公立小学校への進学する子どもたちは多くなく、子どもたちはたくさんいるのだが、同じ地域で同じ学年でも通っている学校園が様々である。そのため、児童センターに来館する子どもたちは多種多様である。

このような環境の地域で子どもたちの生活に重要な居場所が、児童センターだけではなく他にもある。その中のひとつが、地域の学童保育、旭東小学校放課後児童クラブ（呼称さくらクラブ）である。私の意識の中にあった学童保育の概念をガラリと変えた場所であり、児童セン

ターでの自身の働き方を見直すきっかけとなった場所である。地域の子どもたちに根差した学童保育で、子育て世帯のニーズに合わせて受け入れを行っている。地域の公立小学校だけではなく、学区内に居住している近隣の国立、私学、公立の小学校へ通っている子どもたちも受け入れられている。

この旭東小学校放課後児童クラブとの繋がりから、児童センターは「子どもたちの自己肯定感や豊かな心を育む場所」であるべきと考えた。幼児親子から小中高大学生、地域の様々な年代の大人たちの関わりの中で、様々な体験ができる児童センターにおける活動の一端を紹介する。そして「旭東フリー塾」などの活動を通して、子どもたちがそれぞれの立ち位置で輝き、自己肯定感や豊かな心を育める場所として私の目指す「誰もが集え、育ちあっていく児童センターとなり得ていくため」への取り組みを報告していきたい。

2. コロナ禍での経験からアフターコロナに向けての計画実行

旭東児童センター（以下センター）でのコロナ対策に奮闘していた日々が経過し、コロナ禍前の日常に戻りつつある。コロナ禍期間中からのニューライフスタイルに来館する子どもたちや大人の方も慣れ、コロナ禍前まで無かった来館時の手洗いや、周囲の人を気遣ってのマスク着用、大人のソーシャルディスタンス（子どもたちには中々難しい）、施設内の消毒作業などは今となってはすっかり定着している。しかし、コロナ禍初期においては苦悩の連続であった。コロナ禍において、いかにして子どもたちにセンター内での遊びなどを通して体験活動をおこなって行くのか悩んだ。コロナ禍の状況であっても、子どもたちが様々な体験や経験のできるセンター内での活動を私は止めてはならないと感じて過ごしていた。またソーシャルワークに関わって働いているからこそ、コロナ禍以前にセンターで実施していた年間活動計画を、コロナ禍を理由に変えてしまっても良いものかどうか

…どのようにして今までの活動を継続していくのが良いのか、課題は山積みしていた。そして、緊急事態宣言下の臨時休館中に、その当時の職場の同僚たちと子どもが目の前に居ない大人だけの環境で悩み考える日々が続いた。

緊急事態宣言が明け、様々な規制や制限のある中で、センターを開館した。しかし、子どもたちや保護者がコロナ禍でのセンター内の対策に慣れ、満足して遊べるようになるまでは来館者すべての人に相当な理解と協力を得ればならなかったこともあってか、来館者もコロナ禍前の半分以下に止まっていた。そして月日は過ぎ、センターが緊急事態宣言下の2回目の休館中のある日、センターの様子を見に来た子どもからこんな声を聞いた。「ええっ、センターまだ遊べれんのん？大人の遊べる場所は開いているのに、なんで子どもの遊べる場所は閉まるん？大人だけずるいわ。」と。私はこの言葉にドキッとすると同時にハッとさせられ「確かにそうだな…。」と思った。休館中も職員は常に児童センター内には居るのに遊ばせてあげられない現状に、とても子どもたちに申し訳ない気持ちになった。また別の日には幼児親子も来館し、保護者から「センターまだ開かないんですね…。近所にある公園も午後になると小学生がダイナミックな遊びをするので危なくて行かないし、家の中だけで過ごすには限界があるので早く開館して欲しいです…。」と。この保護者の言葉にも、声をかける以外なにもしてあげられなかった現状に胸が締め付けられた。

子どもたちの成長や家族の生活はコロナ禍だからといって止められるものではなかった。むしろ年齢に適したにさまざまな遊びや、体験活動する場をコロナ禍を理由に奪ってしまっはいけないのではないかと考えた。また幼児親子の関係性も、外部との接触ができない家庭内の中だけではどうにもならないこともあると容易に想像がついた。だからこそコロナ禍を理由にして遊びや体験活動のなにかをも制限し、センターでの活動を休止してしまうのはおかしいのではないのかと感じた。そのような日々を過

ごしながら、今までセンターで行なっていた、日々のクラブ活動や遊びの提供、季節の行事や旭東フリー塾などのイベントをコロナ禍で実施するためにはどのような手立てが必要なのか、当時の同じ職場の同僚や館長と悩み考える日々を過ごした。館長はこの状況下でも近隣の小中学校への様子伺いや、地域の方々との情報交換など細やかに動いてくださっていた。私たち職員は活動を再開する時に向けて、施設の環境整備や感染対策について考えた。同業種の人の中には活動再開にコロナ禍を理由に否定的な考えをもっている方もいらっしゃったが、それが正しいとも言いきれなさと感じていた。確かに新型コロナウイルスに感染しない方が良く、命を守ることは大切なことであるが、子どもたちやその家族の心と身体が健康であるためには、外に出て遊び、人と関わることは必要不可欠である。特に幼児親子から小中学生が居る家庭が、家の中だけで、家族だけで、もしくは子どもだけで過ごすことは酷なことであることを、この2回の緊急事態宣言下の休館中に切実に実感していた。

私が働いているセンターは岡山市直営の施設なので、コロナ禍においてさまざまな行政の指示や規制があった。市民が安全に過ごせること、安心・安全に遊べること、命を守ることが第一条件である。それはどこの市町村の施設でも同じであろうし、コロナ禍でなくても当然のことなのだが、コロナ禍になり市の施設だからこそ保身的な考え方に陥りやすいのではないかと日々働きながら感じている。児童センターの休館が長引いているうちに「休館＝保身的ではないのか?」「児童センターを利用している方々の心の健康には寄り添っていないのではないだろうか…」と感じる場面が幾度かあったからだった。

休館中でも電話での育児相談業務は実施していたが、実際には相談の電話は少なく、子育て世代の地域の方にはそれほど周知や認識をされていないのではないかと感じていた。そもそも電話で相談したからと言ってコロナ禍の育児や

子育ての悩みがすべて解決するわけでもないし、かえって不満が募る場合だって容易に想像できる。だからこそ実際に顔を合せて話せる大切さを、このコロナ禍の2回目の緊急事態宣言下で再認識した。このような休館期間を過ごしながら、少しずつでも地域の子どもたちや幼児親子のためにできることからやっていると、当時の私たち職員は、岡山市のコロナ禍における情勢やセンターの年間活動計画、新型コロナウイルスの感染状況と睨めっこし、目の前に迫っている児童福祉週間や旭東フリー塾などのイベント開催、幼児親子の会の再開をどのように行なっていくか検討を重ねた。また、今まで地域協働で連携してくださっている地域の方たち（学校園・放課後児童クラブ・町内会・近隣の公共施設）や児童センターの管理者である岡山市おかやまっ子育成局地域子育て支援課と意見交換を交わしながら、良い方向で活動が行えるように活動再開に向けて調整をおこなった。アフターコロナ・脱コロナを念頭に少しずつではあるが異年齢交流の活動や地域との共同開催の活動などをすべて中止するのではなく、内容や規模の拡大を安全に行なえる様に日々さまざまな工夫をしながら活動してきた。

R5年4月よりコロナ禍前の8割近くまでセンターでの活動を再開した。たくさんの子どもたちやその保護者が来館し、クラブ活動や行事、イベントなど活発に行うことができています。今はまだ館内での飲食制限（飲み物は可）が有り、おやつを食べたり調理などのイベントはできませんが、来年度以降は実施できるようになればと願っている。

3. 旭東児童センターの活動内容

センターでは子どもたちの健全な育成のために、子育て世代に向けた育児相談や幼児から小学生までが参加できる様々なクラブ活動やイベント（行事）を行なっている。そのクラブ活動や行事に中・高・大学生、地域の大人がボランティアとして関り、年間を通して様々な活動ができています。センターでの活動に対する地域か

らの支援体制も充実している。町内会長、地域の児童委員や愛育委員、体協役員、地域担当の保健師、近隣の保、幼、小・中・高校との連携、NPO岡山市子どもセンターや放課後児童クラブとの関わりもあり、幅広い活動の下支えを得られている。

岡山市は近年、未就園児の地域子育て支援に力を入れており、児童センターでも地域子育て拠点事業を行なっている。その中で、幼児親子の会では未就園児を対象とした活動を週2回火曜日と金曜日の午前中に開催し、子育てニーズに対応している。先に触れたように、企業の社宅や家族寮など子育て世代が多く居住する地域であるため、近隣に国公立や私立の3歳児保育のある幼稚園や公立、社会福祉法人が運営する保育園が多く存在する。昨今の家庭環境の多様化もあり、通常の幼稚園就園前の3歳児がまったく居ない訳ではないが、少数である。3歳児が少ない背景はあるが、地域愛育委員の子育て世代への細やかな声掛けや地域担当保健師の連携があり、この幼児の会に年間を通して参加する幼児親子が多い。季節を感じられる活動や、子どもの発達段階に合わせて、さまざまな体験活動が親子でできるように工夫して実践している。この幼児の会に参加することをきっかけに、児童センターの存在を知り、就園・就学を迎え保育園や幼稚園、小学校に入学しても、引き続き子どもたちが安心して遊べる場所としての認識が地域の子育て世代の家庭に根付きつつある。そして、今年度より保護者アンケートのニーズから、新たに水曜日の午後に就園児の会を始めた。就園することによって来館しづらくなる親子も、児童センターとの繋がりが切れない工夫を行なっている。

4. 児童センターに来館する子どもたち 地元・地域中学生との関わり

児童センターには、さまざまな年代の子どもたちが遊びを目当てに来館する。お散歩ついでに来館する幼児親子も居れば、児童センターが画しているクラブ活動や自由遊びを目当てに

来館する小学生、卓球を楽しみにやってくる中高生、時には専門学校生や大学生も来館する。児童センターの受付では時にさまざまな年齢の子どもたちが交わる。成長するにつれ職員との関わり方もさまざまである。小学生は基本、地域の小学生の来館が多く、土曜日には学童保育の子どもたちもセンター内での遊びを目当てに来館をしている。センター職員と地域の小学校の職員との連携も頻繁におこなっていることもあり、多種多様な環境下にある子どもが来館する。人が好きな子どもが多く、センター内で企画している活動にも積極的に参加し、友達といさかいを起こす時もあるが、センター内のルールを守り楽しく過ごしている。

この来館する子どもたちの中で特に中学生との関わりが、異年齢交流の大きな役割を担っているのだが、この地元中学生との関わりは、当初は良好なものとは言えないものだった。センターでの関わりの積み重ねの中で、思春期真っ只中の彼らが少しずつ変化し、関わりが好転していった経緯を記していきたい。

ここで紹介する中学生は現在高校1年生で、私がセンターへ赴任してきた時には小学校6年生であった。小学生の頃からやんちゃだった彼らが中学生になったが、しばらくするとコロナ禍の影響もあり日々の生活の中でさまざまな不運に遭遇した。センター内ルールでは中学生になると、幼児・学童向けに造られたセンターの建物の仕様の兼ね合いから中学生は卓球でしか遊べないことになっている。当時中学1年生になった彼らの生活は、ほとんどがコロナ禍真っ只中の緊急事態宣言中であり、センターへ来館できなかった。中学2年生になった初め彼らはそのルールを受け入れられず、職員の静止を振り切り、好き勝手な振る舞いで職員と衝突することもしばしばあった、また大人を試すような言動も多く見られた。このような状況下の中で、中学生たちへの指導はセンターの職員だけの力だけでは限界があった。中学校へ連絡を入れて、先生方に対応して頂くこともあったが、ここで私が今まで中学校で講師として働いていた時の

小さな事柄からの褒め育て

ことがよみがえった。私が勤務していた中学校は、元気の良い生徒たちが多く、外部からよく苦情の電話がかかって来ていた。「また謝りに行かないといけないのか…。」と数年前、中学校勤務をしていた私は電話を取るとそういった思いに駆られていた。電話口で怒られ、さらに現場に謝りに行って怒られた。手元にある今日中に済ましておきたい仕事は机に山積み…と、どっと疲れた負の連鎖の経験がある。学校の先生方の多忙は承知の上で、問題行動を起こした中学生の対応のお願いをするのは、学校現場を知っているだけにとっても心苦しかった。この関係性「謝罪の連鎖」を好転させたい。苦情だけではなく、来館している子どもたちの良いところを見つけ中学校へ伝えたい。また学校現場で生徒たちに関わっている先生方にプラスになる声掛け「苦情ではなく賛辞」をしたいと日々センターで勤務する中で思うようになっていた。子どもたちのために働いている大人が褒められる環境下でないと、子どもも褒められる経験が少なくなりがちになるのではないかと、中学校の現場を離れて現在のセンターの職場で働くようになり、ひしひしと感じている。褒められることで仕事のモチベーションは確実に上がる。子どもたちの指導に行き詰まる現場が好転できるきっかけは「子どもだけではなく、子どもに関わるみんなを褒めること」ではないかと気がついた。そして来館する中学生への関わりから実践していくことにした。

来館時に受付をしないとセンターでは遊ぶことができない。コロナ禍で受付カードには所属学校、学年、氏名、住所、連絡先、体温を記名しなくてはならないのだが、来館する中学生はプライバシーを理由に記入を拒否し、難癖をつけ自分の名前ですら偽名で書くことが茶飯事であった。お互いに信頼関係を築けていないのだから仕方ないか…と思う反面、センター業務に支障が出る。また嘘をついても遊べると思われても健全育成にならない。そこで「正直に書こう作戦」を実施し、書けるところまで良いから正直に書こうと伝え、本名を書かせそれ

を褒めた。そこから来館する中学生たちに向けた「褒めの積み重ね運動」を開始した。(この「褒めの積み重ね運動」はその後、学童向けのチャレンジクラブに繋がる)一週間でも何ヶ月掛かっても良いから全て記入できるように、褒めることを意識しながら声掛けを行った。また時には中学生の先を見据えて「高校受験や就職時には自分で住所が書けるようにならんとおえんのんよ。」と言葉を付け加えながら声掛けを行なった。1人ができるようになると、一緒に来ている友達も周りの様子を見ながら少しずつ受付カードの記入欄が埋まっていった。良い集団心理が働き始めたのだった。そして見回りや学校のお便りを持って来てくださる教頭や生徒指導の先生に、日頃の来館の様子に加え受付カードがちゃんと書けるようになり助かっていることを伝えた。これを学校の先生方が「最近、児童センターでちゃんとできて遊べてるらしいが!」と生徒に伝えてくださったことから、関わりが好転する歯車が回り始めた。そして月日は経ち、校外活動が緩和されたR4昨年の夏、彼らは中学3年生になり、旭東フリー塾の「サッカー教室」で小学生や幼児にサッカーを教え大活躍をした。自分たちの思い通りにならないければ悪態をついていた彼らが見違えるほど成長し、年下の子どもたちにサッカーの面白さを相手のことを考えながら教える姿を見て感極まった。周りの人たちに感謝を伝えることのできる好青年に成長したのであった。

この地元中学生たちに役割を与え、大きく好転させるきっかけが、NPO法人岡山市子どもセンターと旭東学区コミュニティ、岡山市旭東児童センターの地域協働活動で毎年夏休みに行われる「旭東フリー塾」である。この塾には地元の中学生以外に地域にある国公立の中学生や時に私立の中高生も関わり、夏休み期間中にそれぞれ活躍している。そのことについて記していきたい。

5. 旭東フリー塾

旭東フリー塾はNPO法人岡山市子どもセンターに関わりのある地域の方と旭東学区コミュニティの支援のもと20数年前より「地域の子どものため」に始められたNPO法人岡山市子どもセンターの活動であった。この活動に、以前から活動場所の提供として旭東児童センターは関わっていたが、私が赴任してきた5年前より「旭東フリー塾」を地域に活動をおろすということになり、さまざまな協議の結果、事務局をNPO法人岡山市子どもセンターと共に地域の子どもの参加しやすい立地にある岡山市旭東児童センターが務めることになっていた。現在は地域協働活動としてNPO法人岡山市子どもセンターの地区担当の方と共に岡山市旭東児童センターが事務局となり地域コミュニティ組織にも協力してもらい「旭東フリー塾実行委員会」を立ち上げ活発に活動をおこなっている。

以前より「旭東フリー塾」はNPO法人岡山市子どもセンターと地域の人に関わり「旭東フリー塾実行委員会企画書」が作成されている。そのことについて記していきたい。

(1) 旭東フリー塾開塾趣意

子どもを取り巻く現状が厳しさを増している現在、少子化、核家族化に加え、地域社会のつながりが希薄になってきていることで、子どもが地域の様々な人と接する機会がますます少なくなっている。また、スマートフォン、インターネットやゲームなどに費やす時間が増えたことで、実体験する時間や場が減り、子どもたちの成長に危機感がますます高まっている。旭東フリー塾は、地域住民が主体となり、体験活動の場を子どもたちに提供するもので、参加する小学生のみならず、地域からも期待されている。同時にボランティアで関わる中学生、高校生をはじめとする地域住民の学びの場となり、地域コミュニティの再生へとつながっていくと考えられる。そこで、現在までに育んできた地域とのつながりや地域の特性を大切にしながら子どもの育ちがより豊かなものになる

ことを目指して旭東フリー塾を開塾したいと考えている。

(2) 目的

- ①子どもの生きる力の育成につながる実体験活動の機会を提供する。
- ②講師やスタッフとして地域住民や中高生が主体的に参加することで、地域のネットワークを拡げ、子どもが豊かに育つ地域コミュニティづくりを進める。
- ③地域における日常的な子どもの居場所作りを充実させる。

(3) 重点課題

実施に当たっては、以下の3点を重点課題とする。

- ①講座の内容は、自分の手や体を使い工夫して作り上げる工作、身近な材料を使った科学遊び、友達と協力しながらつくる料理、昔あそびなどの三世代交流、地域の歴史や自然を生かしたもの等、子どもの五感を刺激し心と成長を支える体験活動を中心とする。
- ②講師・スタッフとして、地域で生活している様々な年齢や職業の方にお話し、事前の打ち合わせやふり返りの会で講座の内容、子どもの成長について話し、日常的な子どもの居場所作りを充実させる。
- ③中高生を積極的にスタッフとして迎え、主体的な関わりをつくっていく。小学生から地域住民から信頼され、任される体験を通して、中高生に社会的な役割を実感してもらい、中高生の地域における居場所作りを充実させる。

(4) 企画内容

- ①名称 旭東フリー塾
- ②実行委員 旭東学区連合町内会 旭東学区コミュニティ協議会 旭東学区栄養改善委員会 旭東学区体育協会 岡山市立旭東小学校 旭東小学校PTA 岡山市立東山中学校 岡山市福祉交流プラザ 旭東 旭東小学校放課後児童ク

小さな事柄からの褒め育て

- ラブ（さくらクラブ） NPO
法人 岡山市子どもセンター（旭東地区）岡山市旭東児童センター
- ③事務局 NPO 法人岡山市子どもセンター（旭東地区） 岡山市旭東児童センター
- ④後援 岡山市 旭東地区民生委員児童委員協議会（児童部会）旭東学区交通安全母の会 旭東地区愛育委員会
- ⑤開催場所 岡山市旭東小学校 岡山市旭東児童センター
- ⑥参加対象者 参加者：小学生 100 名
スタッフ：中学生以上 80 名
- ⑦事業内容 フリー塾開催 実施報告書作成

(5) 実施スケジュール

- ①3月 企画委員会、事務局発足 旭東フリー塾開塾協力依頼
- ②5月下旬 第1回実行委員会：計画(日時・内容・費用・分担等)
- ③6月初旬 第2回実行委員会：具体的内容検討
- ④6月中旬 旭東フリー塾案内チラシ作成
- ⑤7月上旬 旭東フリー塾案内チラシ配布
- ⑥7～9月 旭東フリー塾開催
- ⑦10月 第3回実行委員会：ふり返り・実施報告書作成

(6) 期待される効果

- ①子どもが自分で工夫したり、友達と協力したりしながら体験活動をする中で、バーチャルなものからでは得られない実体験をし、生きる力が育まれる。
- ②参加した小学生、スタッフの中高生や大人など地域の人が知り合い、触れ合うことで人のつながりが生まれ、地域コミュニティが活性化される。
- ③旭東フリー塾に参加したスタッフや地域住民を中心に、子どもを核にした地域ネットワークが広がり、子どもの日常的な居場所作りが充実する。

- ④実践報告書を地域に配布することで成果が発信でき、地域の結びつきが強まる。

以上の企画書を NPO 法人岡山市子どもセンターの地区担当の方を中心に作成されており、地域の小学校から中高生の子どもたちが夏休みの期間を有意義に過ごせ、豊かな育ちにつながるように計画がなされていた。そこに事務局として岡山市旭東児童センターも加わり、幼児親子も参加する幅広い世代間交流、そして地域協働活動がおこなえる場所として、「子どものことなら児童センターへ」の役割が旭東フリー塾を通して地域へ定着しつつある。

この企画を基に毎年さまざまな活動を計画し、例年夏休み期間中に7講座前後を行なっている。

※詳細は別紙 実践報告書「旭東フリー塾 わくわく新聞」を参照していただきたい。

こうして先に記している中学生たちが大活躍の経験や体験のできる場所を作ることができ、それに参加した幼児や小学生たちが中学生に憧れをもち「あのようやさしくカッコいい中学生になりたい」と思わせる魅力を十分に発揮できる「旭東フリー塾」となっている。また地域の方に褒められ、認められる好循環も生まれ、中学生は役割を与えられることで輝き、小学生も幼児も豊かに育つことのできる経験や体験、学びの場となっている。

旭東フリー塾は、旭東学区の方々の子どもたちに対する熱い思いを岡山市旭東児童センターの職員も賛同し、子どもの育ちを共有することで地域協働で実施することができている。幅広い下支えをたくさんの地域の方々が行なってくださることに心から感謝している。

6. チャレンジクラブ

コロナ期間中に小学生に向けて始めた活動がチャレンジクラブである。そもそもコロナ期間中に未曾有の経験をする中、子どもたちにコロナ禍でのルールを課せるばかり（あれしてはいけない、これしてはいけないと規制ばかり）を行なっている間に、地元中学生の対応のことも

あつたりと負の連鎖（注意ばかり）という閉塞感を抱いていた。

そんな中、地元中学生に個人的に行っていた「褒めの積み重ね運動」を一緒に働いている先輩職員も見ていて「子どもたちを無条件に褒めたいよな… どうでもいい事でも。」と声が上がった。旭東児童センターでは1週間を通して運動系のクラブ活動や、ものづくりなどの文化系クラブ行っていたが、コロナ期間中、高齢ということもあり地域の講師の方の参加も無くなり、職員もクラブ活動の実施に非常に悩んでいた時であった。私たち職員が自信をもって関われるクラブ活動にするのが良いのではないかと先輩職員が考え「ソーシャルディスタンスがはかれて、達成感のあるチャレンジクラブはどうだろう。」と提案された。そこでチャレンジランキングを基に考えた。「学校でも叱られ、児童センターでも注意される」より「児童センターに来たら認められ、褒めてあげられる活動がしたい」と、最初はそんなことがきっかけで毎週木曜日に始まった。当初は「小学生は参加してくれるだろうか？」と不安な思いもあったが、子どもたちのコロナ禍の経験も重なり、認め褒めてもらえる「チャレンジクラブ」は軌道に乗った。

毎週木曜日には必ず保護者の方も一緒に来館し、子どもたちのチャレンジする姿を見守り、職員ともに喜びを共有できるクラブへと変化していった。そうして月日が過ぎR5年の5月、クラブ開始当時から参加してくれている子どもたちに向けて、「『ギネス世界記録に挑戦』してみないか？」との声掛けに「やるやる！」と元気な声が返ってきた。今までのチャレンジクラブでやってきた「認め褒める」を繰り返し「達成感の共有」を子どもたちとセンターの全職員、保護者や地域の大人たちと積み重ねていった結果、子どもたち同士で自主的に切磋琢磨する姿が見られるようになった。その結果として、参加したどの競技も好成績を収めることができ「ギネス世界記録保持者」が参加した子どもたちから誕生した。「小さな事柄からの褒め育て」

が成功したことを実感した瞬間であった。

7. 今後につなげていくために

子どもを中心とした地域協働活動をおこない、子どもたちの豊かな育ちにつなげていくために、地域の資源をフル活用し奮闘して下さっている地域のコミュニティ組織があつてこそ「誰もが集え、育ちあつていく児童センターとなり得ていく」とこの数年勤務しながら実感している。しかし、その地域協働活動に課題も見えてきている。それは各年代ごとの地域への関わり方やパワーバランスである。どこの地域でも抱えている問題ではあると思うが、次世代へのバトンタッチがスムーズにおこなえていない現状がある。それは若い世代の地域への関わりが希薄になっていることに問題があると感じている。この事象を解消するためにも、児童センター内での地域協働活動が重要で「地域の中で子どもを認め褒め」バトンタッチできる次世代を育てていくことが「今後につなげていくこと」につながると思っている。今の子どもたちが「この地域に帰ってきて子育てがしたい」とか「地域の中で活躍したい」と思えるような基盤づくりを「誰もが集え、育ちあつていく児童センター」の中で今後大切に育てていきたい。